はじめに

知識基盤社会の到来や経済のグローバル化の進展に伴い、次代を担う児童生徒には、ものごとを深く考えさせ、その本質を理解させるとともに、社会の変化に柔軟に対応する能力を身に付けさせることが、ますます重要になってきています。

しかしながら、近年の国内外の学力調査の結果をみると、我が国の児童生徒には読解力や記述式問題の解答に弱点があり、知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の低下が明らかになっています。

このような社会の変化や児童生徒の課題を踏まえ、文部科学省は平成18年12月、学校教育法を改正し、学力の重要な３つの要素を定めるとともに、その一つに「基礎的な知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」を盛り込みました。さらに、平成20年１月の中央教育審議会答申において、「教育内容に関する主な改善事項」の第１項目に「言語活動の充実」をあげ、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である」と明示しました。

こうして、言語活動を充実させる取組が国を挙げて行われていますが、学校への浸透は十分とは言えない状態です。その原因として、教員の心理的要因が考えられます。具体的には、「基礎的な知識や技能の習得に手一杯で、言語活動を充実させる時間は取れそうにない」「言語活動を充実させようにも、やり方が分からない」「言語活動を充実させるのは、準備を含めて大変なんじゃないか」といった不安を、多くの教員がもっているものと思われます。

このため、本研究では「誰もが今日から取り組める言語活動」を合言葉に、教員が言語活動の必要性について理解し、授業改善を進めることを目的に、２年間調査研究に取り組み、次の２つの編から成るハンドブックを作成いたしました。

ア　言語活動の充実が必要となった背景から、言語活動の意味、言語活動を充実させるための方策までを総論編として簡潔にまとめました。
イ　充実した言語活動の実践として、各学科に共通する教科（６教科）、及び専門教科（３教科）について、20の指導事例を収集し、教科編にまとめました。

教科編の特徴は、次の３つです。①単元で付けたい力と言語活動との関係を明確にしました。②思考と判断を促す発問や指示を具体的に示しました。③充実した言語活動を創るための評価規準を設定し、指導と評価の一体化を図りました。

まずは、チェックシートで言語活動の理解度を確認された後、必要な項目に進んでください。先生方の言語活動を充実させた授業づくりに、本ハンドブックが少しでも役立てば幸いです。

平成２５年２月

福岡県教育センター　所長　清田　嘉治